

機関番号：22604

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20520168

研究課題名（和文）批注の体例-近世中期上方における明清漢籍受容の展開-

研究課題名（英文） A style of notes and comments on the text -an development of the acceptance of the Ming-Qing Chinese Classic in the middle ages of early modern at Kamigata.

研究代表者

稲田 篤信(INADA ATSUNOBU)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：20168404

研究成果の概要（和文）：

江戸期に伝来した『春秋左氏伝』、『水滸伝』、『世説新語補』の明清漢籍版本とその和刻本について、書誌、受容実態の調査を実施し、本文の上欄行間に付加された明清の新注や批点の体例を考察した。『水滸伝』、『世説新語補』については、李卓吾批点本を中心に調査を行った。

『水滸伝』について、東アジアにおける言語接触と文化受容の観点から雑誌特集を企画した。

明清漢籍の影響が広く文学学芸の分野に浸透していることを、平賀中南、上田秋成、曲亭馬琴について検証した。

研究成果の概要（英文）：

I researched on the bibliography and the actual conditions about the Ming Qing classics of "春秋左氏伝", "水滸伝", "世説新語補", which had been imported from China to Japan at the Edo period, and analyzed the style of additional notes and comments on those texts.

As for the "水滸伝", and the "世説新語補", I mainly looked into the texts that 李卓吾 had put his comments on. Concerning the "水滸伝", I planned the special issue of the magazine viewed on the language contacts and the cultural acceptance in the East Asia.

I verified that the Ming Qing Chinese Classic had great influences on a broad area of the literatures and the liberal arts through the studies of the Japanese literary persons such as "平賀中南", "上田秋成", "曲亭馬琴".

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
総計	2,400,000	720,000	3,120,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：近世文学

## 1. 研究開始当初の背景

わが国読書人が漢文文献の読解に大きな努力と工夫を重ねてきたことはいままでもない。本文にさまざまな注記を書き込み、上欄や行間にコメントを書き加えたことなど

は、訓点語研究、抄物研究の成果が示している。

近世期以前にはおいては、こうした漢籍読書の工夫は、主に学僧や博士家の伝承であったが、近世期に至って一般読者の要求に応え

るために、出版文化の中で版本の紙面構成に繰り込まれることになった。

先に科学研究費補助金を受けた二つの研究課題「漢籍の読書抄記—近世中期上方人文社会に即して—」(2003-2005年度)、および「和刻本の制作—近世中期上方における明清漢籍の受容—」(2006-2007年度)において、近世中期に多量に伝来した明清漢籍によって上方人文社会が新傾向の文化的刺激をどのように受容したかを検討した。

前者では奥田松斎『拙古堂日纂』、都賀庭鐘『過目抄』、森川竹窓『古香齋筆記』、沢田一斎『奚疑齋蔵書』などの読書ノート进行分析した。後者では、和刻本『江邨銷夏録』の制作に関わった木村兼葭堂、『隸統』の和刻本を刊行した河内屋吉兵衛、漢籍の購入者西田嘉兵衛等々、当時の上方知識人の事績について考察した。

本研究はこれを承けて、上方の知識人がみずからの著作の中に明清学芸をどのように吸収したか、より踏み込んだ考察を企図したものである。

## 2. 研究の目的

近世中期、中国明清文化の刺激によって、わが国の思想・学芸の世界に新しい自覚が生じていることは、例えば「明風」(中野三)といった概括によって、より鮮明に確認されつつある。

本研究は、こうした中国文化の影響を日本近世文学研究、日本近世学芸史研究の立場から、近世中期(18~19世紀。享保期から文政期)、大坂を中心とした上方における明清漢籍の伝来状況の実態を、特に『春秋左氏伝』、『水滸伝』、『世説新語補』の三者の明清版本(校本、注本)とその和刻本に即して調査し、批注の果たした役割を、その体例の観点から考察を加えるものである。

研究の対象に選んだ『春秋左氏伝』、『水滸伝』、『世説新語補』は、もとより伝来も性格も異なるものであるが、他の漢籍と同じく、明代、清代に至って、新しいテキストが作られ、匡郭上欄や行間に新しい注釈や批評が書き加えられた本が出現した。学問上の新説であるところの明注、清注とともに、本文批評にあたる批点が付されているのも大きな特色である。巻首題下署名には、刪定、批釈、批点、校注に関与した人物の名が並ぶが、ここには李卓吾や王世貞など、わが国の思想界、学芸界に大きな影響を与えた人物の名が現れる。『春秋左氏伝』、『水滸伝』、『世説新語補』の三者は明清の批注が加わることで、新たな言語接触の文化刺激をもつテキストとして近世日本に到来しことになった。本研究の目的は、こうした新知識の受容の先端にいた近世中期上方人文社会の言語文化状況の観察と分析である。

## 3. 研究の方法

『春秋左氏伝』、『世説新語補』、『水滸伝』の三者の明版清版とその和刻本を調査の対象として考察を行うものである。そのために、書誌学的に版本研究として和漢両者の相互関係を明らかにすることが前提条件である。また、三者に関しては、注釈書、辞書等関連する文献が多い。これらの諸文献の書誌文献調査もあわせて行った。

3年間で調査を実施した主な所蔵機関は以下の通りである。

国立国会図書館・国立公文書館内閣文庫・お茶の水図書館成實堂文庫・宮内庁書陵部・東京都立中央図書館・静嘉堂文庫等(以上東京地区)／京都大学人文科学研究所東アジア人文学情報センター・立命館大学図書館・大阪府立中之島図書館・関西大学図書館内藤文庫・天理大学附属天理図書館等(以上関西地区)／本居宣長記念館・西尾市岩瀬文庫・金沢市立玉川図書館(以上中部北陸地区)／尾道市立図書館・尾道市立美術館・広島市立図書館浅野文庫(以上広島地区)／中国国家図書館(北京市)

以上の機関で特に留意して調査を行ったのは、以下の文献である。

### (1) 『春秋左氏伝』

那波魯堂句読集解本・奥田松斎句読評林本・本居宣長書入集解本・和刻本『東萊博議』・春秋稽古』等。

### (2) 『水滸伝』

120回本各種。70回本各種・和刻本『忠義水滸伝』・唐話辞書『忠義水滸伝抄訳』・同『後篇』・同『忠義水滸伝解』等。

### (3) 『世説新語補』

李卓吾批点本他明清版各種・『世説新語姓彙韻分』等朝鮮刻本・和刻本二種(元禄版と安永改刻版)。那波魯堂書入れ本・尾藤二洲書入れ本・『世説新語補索解』・『世説新語補考』・『世説音釈』・『世説箋本』・『世説新語補觸』等。

上方の受容者・著(撰)者は一方で書物の貸借、共著といった共同作業など、相互に緊密な交友関係を築いており、個々の文業とともに彼らの交流の実態についても考慮して、調査を行った。

## 4. 研究成果

今回、明清漢籍に句読を施したり、独自に注釈書を著作するなど、『春秋左氏伝』、『水滸伝』、『世説新語補』三者に関わりのある上方知識人の中から、奥田松斎、那波魯堂、尾藤二洲、平賀中南、皆川淇園、釈大典などを考察の対象として調査を行った。特に三者のテキストに業績のある平賀中南については(『春秋稽古』、『忠義水滸伝抄訳』序、『世説新語補索解』)、従来その事績が知られていな

いこともあって、伝記を含めた総合的な調査を行った。

本文に読者の知見を加える批注は、注釈や批評の営為と関連性があり、上田秋成、曲亭馬琴をはじめとした近世小説作者の批評意識に関わる。そうした影響関係の諸問題としても考察した。

以下、いくつか得られた知見・成果を説明する。

(1)『春秋左氏伝』に関して、近世期新渡の注釈書各種およびその和刻本を調査した。

その内、『音註全文括例春秋始末左伝句読直解』（『春秋左氏伝評林』）は、宋林堯叟注、明凌稚隆輯校、清古榕方延珪評点の本を奥田元継（松齋）が輯校して句読を施したものである。参照に便利な版面構成と、本文と詳細な批注に句読を施し、読書界に受け入れて広く流布している。

師説（堀杏庵点・景山改訓）を忠実に書き写したことで知られる宣長手沢本『春秋左氏伝集解』（本居宣長記念館蔵・慶長古活字本）について調査した。宣長の精励が印象的であるが、一方で、宣長の学問環境を『春秋左氏伝評林』や那波魯堂校『春秋左氏伝集解』などの同時代文献の中に置いて検証する必要もある。

頼春水の師、平賀中南『春秋稽古』の伝本三種（国立国会図書館本・東京都立中央図書館本・二松学舎大学附属図書館本）について調査した。同書もまた明凌稚隆注を参照して新しい読解を志している。

(2)『水滸伝』に関して、李卓吾本と呼ばれた『水滸伝』120回本を中心とした諸本と和刻本『忠義水滸伝』について調査した。李卓吾は「童心説」や「発憤説」が近世日本の思想界、文学界に大きな影響を与えたことで知られる明代の思想家である。

雑誌「アジア遊学」131号（勉誠出版刊）において、『水滸伝』の衝撃」と題して、特集を企画編集した。中国文学語学、中国史学、日本文学語学、朝鮮語学など、広く内外の研究者24名（海外2名）の参加を得て、わが国の『水滸伝』研究および受容史研究の水準を反映した内容となった。「東アジアにおける言語接触と文化受容」の諸側面を考察する意図は達成されたと考えている。

「はじめに」において、本特集の企画意図を述べたほか、明治雑誌「めさまし草」の『水滸伝』特集号を題材にして、森槐南、依田学海、森鷗外、政岡子規などの旧蔵本『水滸伝』について言及した。これはわが国伝世の明清版『水滸伝』の調査の過程で披見調査したものである。わが国には70回本清版を中心に数多くの伝本がある。ここに述べたもののほ

か、中川忠英（大阪天満宮文庫）などの伝本についても調査した。

また、同誌に個別論文として、「平賀中南—「水滸伝訳序」注解—」を掲載した。後者は唐話辞書の一つ『忠義水滸伝訳抄』に序を書いた儒学者平賀中南の事績と上方人文社会における位置の素描を行ったものである。鳥山輔昌、大潮、唐音主義、百二十回本などについて考察した。

「高知平山」は、2頁足らずの小文であるが、従来不明であった『聖歎外書水滸伝』の施読者高知平山の伝記についての報告である。

(3)『世説新語補』に関して、同書には『水滸伝』とともに李卓吾批点本があることに留意し、明版・清版の『世説新語補』、並びに和刻本二種（元禄版・安永改刻版）の調査を行った。明清版諸本の調査は継続中であるが、諸本全体から見れば、和刻本の底本と考えられる明版李卓吾批点本は中日ともにきわめて伝本の少ない本であり、必ずしも一般的な本ではない。李卓吾批点本をそのまま用いて、李于鱗の名を冠した本すらある。批点の体例・内容とともに、批点者そのものをどう考えるか、和刻本がなぜこの本を定本にしたか、安永改刻本が付加したものは何かなど、なお今後、慎重な検証が必要である。

お茶の水図書館成實堂文庫（東京）その他に蔵される朝鮮刻本について調査を行った。他の漢籍と同様に、『世説新語補』の場合についても、中日二国間ではなくて、東アジアの範囲で文化接触を考察しなければならないことを痛感した。

昌平饗儒者尾藤二洲と阿波藩儒那波魯堂の書入れ本『世説新語補』（国立公文書館・関西大学図書館）を調査した。二洲（頼春水友人）と魯堂（奥田松齋実兄）の儒学界に占める地位を考慮すると、二人の『世説新語補』に対する関心は注目に値する。元禄期に受容した本が近世中期にもう一度クローズアップされる例としても興味深い。

『世説新語補』は『世説新語』の続撰書の一つであり、これがなぜ日本の近世期に盛行をみたか、今後、書誌調査・資料収集を継続して、分析吟味を行いたいと考えている。

また、先の平賀中南『世説新語補索解』についても調査した。中南の学問と上方における人的交流については、前掲論文（「アジア遊学」131号）において言及した。

(4) 上田秋成について、明清漢籍との関連について、

①2011年3月24日、北京日本学研究中心（北京市）において、「日本近世（江戸期）の学者・画家・歌人たち—上田秋成『胆大小

心録』の人物評を通して」と題して講演を行った。『胆大小心録』の記事によって、本居宣長や小沢蘆庵、池大雅との交遊を紹介した。池大雅について、彼が自筆で外題を書き付けた大阪天満宮文庫蔵本の清趙吉士『寄園寄所寄』を紹介して（この本については既に管宗次に報告がある）、大雅の漢籍への愛好にふれた。同書は明代の故事を多く収め、わが国ではほかにも熱心な読者が存在する。

③2010年7月17日から8月29日の間、京都国立博物館において、「特別展観 没後 200年記念 上田秋成」展（日本近世文学会・京都博物館主催）が行われたが、日本近世文学会の実行委員の一人として準備実行に加わり、関連して二種の図録（共著）作成にかかわった。本展覧会の趣旨は、秋成の『胆大小心録』に現れる文人画家たちとの交流にスポットを当てたものであった。同書には村瀬栲亭、池大雅など、明清学芸の世界と密接な関係を有する人物たちが多く登場する。本展覧会に関連して、2010年7月31日に京都国立博物館主催の土曜講座（於京都女子大学）において、「秋成のつづら箱一知られざる名作の数々」と題して講演を行った。

③2009年11月1日に首都師範大学主催（北京市）のシンポジウム「カルチュラルスタデーズの視野における日本文学」に参加して、「上田秋成が読んだ中国明清の漢籍」と題して講演を行った。『胆大小心録』その他に所引の文献について考察し、秋成文学の「命禄」や「名分」、「分度」といったキーワードと明清諸家の著作との関連、木村兼葭堂を中心とした上方学芸界の中国憧憬の文化的特質について、近世中期の文化接触の一例として、基調報告を行った。

④大学生向け教科書『雨月物語精読』を公刊した。

以上について、明清漢籍研究の成果を秋成研究に生かすことが出来た。

(5) 馬琴読本との関連について、『日本のことばと文化-日本と中国の日本文化研究の接点-』所収論文「父と子」は、『八犬伝』の作品研究であるが、『芸文類聚』、『捜神記』、『五代史』、『天中記』などの明清漢籍調査の知見を盛り込むことが出来た。

## 5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計3件）

- ① 稲田篤信 平賀中南-「水滸伝抄訳序」注解- アジア遊学 査読無 131号 2010

105-112

- ② 稲田篤信 『雨月物語』の風景 アジア遊学 査読無 125号 2009 138-142  
③ 稲田篤信 『筑紫道記』と『雨月物語』文学 査読無 隔月刊10巻1号 1・2月号 2009 68-76

〔学会発表〕（計1件）

- ① 稲田篤信 上田秋成が読んだ中国明清の漢籍 「カルチュラルスタデーズの視野における日本文学」シンポジウム特別講演（北京市 首都師範大学主催・国際交流基金・北京日本学研究中心後援）2009年11月1日 於北京紫玉飯店

〔図書〕（計2件）

- ① 稲田篤信・他43名『日本のことばと文化-日本と中国の日本文化研究の接点-』溪水社 2009 637(167-176)  
② 稲田篤信『雨月物語精読』 勉誠出版 2009 224

〔その他〕

(1) 図録（計2件）

- ① 稲田篤信・木越治・長島弘明・飯倉洋一・水谷亜希『上田秋成 没後 200年記念』日本近世文学会 2010 104  
② 稲田篤信・木越治・長島弘明・飯倉洋一・水谷亜希『特別展観 没後 200年記念 上田秋成』 京都国立博物館 2010 32

(2) 報告（計1件）

- ① 稲田篤信 高知平山 江戸風雅 3号 2010 178-179

(3) 講演（計3件）

- ① 稲田篤信 日本近世（江戸期）の学者・画家・歌人たち-上田秋成『胆大小心録』の人物評を通して- 北京日本学研究中心（北京市） 2011  
② 稲田篤信 秋成のつづら箱一知られざる名作の数々- 京都博物館土曜講座（京都女子大学） 2010  
③ 稲田篤信 位争い-日本文学における兄と弟- 北京日本学研究中心（北京市） 2009

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

稲田篤信 (INADA ATSUNOBU)

首都大学東京・人文科学研究科・教授

研究者番号：20168404